

いのちを捨てる牧者

ヨハネの福音書 10 章 7-21 節

はじめに

イエス様は、ヨハネの福音書 10 章の始めで、「牧者と羊」の話をされました。牧者は門から入ってくる。門から入って来ないでほかのところを乗り越えて来るのは盗人であり強盗である。羊は牧者の声をよく知っていて、牧者以外の声には決してついて行かない。そういう話をされました。この話は、6 節で「**比喩**」とされていますから、何か隠された意味があるのです。つまり何かの真理を表しているのです。しかし、この話を聞いたパリサイ人たちは、「**何のことか、分からなかった**」と 6 節にあります。パリサイ人たちには、この話に隠された意味も、この話が表している真理も分からなかったのです。

そこでイエス様は、7 節からこの話の解説をされていくのです。7 節でイエス様は、「**わたしは羊たちの門です**」と言われて、この話の「門」とは、イエス様のことだと言われます。また 11 節でイエス様は、「**わたしは良い牧者です**」と言われて、この話の「牧者」とは、イエス様のことだと言われるのです。

今日の説教では、特にイエス様がご自身を「良い牧者」だと言われた 11-18 節を中心に学んでみたいと思います。

1. 良い牧者とは？

イエス様は 11-13 節で、こう言われます。「**わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。牧者でない雇い人は、羊たちが自分のものではないので、狼が来るのを見ると、置き去りにして逃げてしまいます。それで、狼は羊たちを奪ったり散らしたりします。彼は雇い人で、羊たちのことを心にかけしていないからです**」。

イエス様はご自分のことを、「良い牧者」だと言われます。「牧者」という言葉は、ギリシヤ語の「ポイメーン」という言葉ですが、新改訳聖書では、三つの言葉に訳されます。一つは、今日の聖書箇所のように「牧者」です。もう一つは「羊飼い」です。そして一箇所だけ、「牧師」と訳されている箇所があります。それは、エペソ 4：11 です。その意味で、「牧師」というのは、「牧者」のことであり、「羊飼い」のことです。そして同時に、イエス様が「わたしは良い牧者です」と言われた言葉は、「わたしは良い牧師です」と言い換えることもできるのです。イエス様は、「良い牧師」なのです。16 節に、「**一つの群れ、一人の牧者となるのです**」とありますが、教会というのは、本来一つのもので、目に見える教会は、いくつもありますが、目に見えない教会、つまり先ほど『使徒信条』で告白した「**聖なる公同の教会**」は、一つのもので、イエス様はその「**聖なる公同の教会**」の「**牧師**」であるのです。

私たちはその「聖なる公同の教会」の信徒であり、私たちの本当の牧師はイエス様であるのです。私たちは皆、イエス様に牧会される信徒であり、羊なのです。

さて、イエス様はここで、「良い牧者」と「牧者でない雇い人」を比較しています。「雇い人」とは、「雇われて働く人」です。雇い人は、自分の羊を持っていません。他人の羊を、賃金をもらって世話をするのが、雇い人です。雇い人は、自分のものではない他人の羊を世話するので、いい加減です。狼が来ても、羊を置き去りにして逃げてしまうのです。雇い人にとって大切なのは、羊ではなく、お金であり報酬なのです。雇い人は、「**羊たちのことを心にかけていない**」です。

私は、羊は飼っていませんが、約一年前から子犬を飼っています。一年前までは、犬に全く関心がありませんでした。しかし実際に飼ってみると、やはり可愛いものです。散歩などしていると、他人の犬でも可愛く見えてきます。しかしそれでも、自分の家の子犬は特別です。誰にお金をもらうわけでもないけれど、自然と世話をします。一日二回エサをあげ、一日一回必ず散歩をします。夏は日中、誰も家にいないのに、子犬のためだけに冷房をかけておきます。熱中症にならないためです。この子犬のために、多くの時間やお金を使います。それはなぜかというと、「自分の子犬」だからです。「他人の子犬」には、ここまでできません。自分の子犬になると、自然と愛着が沸き、「心をかける」ようになるのです。

イエス様は「良い牧者」です。イエス様は、ご自分の羊をいつも心にかけて、ご自分のいのちまで捨ててください。ご自分の「いのち」よりも、ご自分の「羊」のことを大切に思ってください。ヨハネ 15：13 で、イエス様はこう言われました。「**人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません**」。イエス様によれば、「いのちを捨てる」ということは、最高の愛の表現なのです。イエス様は、最も大きな愛で、ご自分の羊を愛しておられるのです。

「良い牧者」であるイエス様は、ご自分の羊をいつも心にかけておられます。13 節に出てくる「心にかかる」という言葉は、ギリシア語の「メレイ」という言葉ですが、Ⅰペテロ 5：7 で、このように使われます。「**あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです**」。ここの「心配する」と訳されている言葉が、「心にかかる」「メレイ」です。イエス様は、ご自分の羊のことを、いつも「心配して」おられるのです。ここでの「心配する」というのは、「思い煩う」とか「不安に思う」という意味ではありません。いつも「心にかかる」という意味での「心配する」です。

では、このような「良い牧者」を持つイエス様の羊とは、一体誰のことでしょうか。10：27 で、イエス様はこう言われます。「**わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます**」。イエス様の羊とは、イエス様の声を聞き分け、イエス様について行く人です。他の人の声に従い、他の人について行く人ではありません。イエス様と他の人の声を聞き分け、イエス様だけについて行く人です。

2. 私を知っているイエス

14-15 節でイエス様は、もう一度、ご自分は「良い牧者」であり、「羊のためにいのちを捨てる」と言われます。しかし、「良い牧者」と「いのちを捨てる」という言葉の間に、言葉を挟まれます。それは、「**わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています。ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです**」という言葉です。「良い牧者」であるイエス様は、ご自分の羊のことをよく知っておられます。どれくらい知っているのかというと、父なる神様がイエス様を知っているのと同じくらい、またイエス様が父なる神様を知っているのと同じくらいだと言われるのです。私たちはイエス様に、完全に知られているのです。

しかし私たちは、本当に神様は私のことを知っているのか、私のことを忘れていないかと不安に思うことはないでしょうか。正直に言いますと、私はあります。神様は、さがみのキリスト教会を忘れてしまったのではないか、と思っていた時期がありました。コロナ過で、礼拝出席者も、コロナ前に比べて約六割程度になりました。新来者もほとんど来ない、そういう時期が長く続きました。どんなに祈っても改善しない、どんなに活動しても改善しない、そういう中で焦りと不安を覚えていました。そのような中で、会堂 1 階のリフォーム工事の計画が始まりました。予算は 300 万円。手持ちは 115 万円しかない。会堂献金から 100 万円支出するとしても、85 万円はどうしても足りない。そこで献金を募らなければならない。約 20 人しかいない教会で、85 万円が集まるだろうか。40 万円集まればよい所ではないか、そのような思いでした。しかし実際に献金を募ってみると、120 万円もの献金がわずか一か月で集まりました。この時に私は思いました。神様は、さがみのキリスト教会を決して忘れていない、この小さな群れを確かに覚えていてくださっていると。イエス様は、ご自分の羊の群れを決して忘れず、覚えていてくださいます。そして、私たち一人ひとりをも忘れず、誰よりも知っていてくださるのです。

3. 囲いに属さない羊たちがいる

さて、16 節でイエス様は、こう言われます。「**わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらを、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に従います。そして、一つの群れ、一人の牧者となるのです**」。

イエス様は、「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます」と言われます。当時、イエス様の宣教活動によって、イエス様を信じ、イエス様の羊となった人のほとんどは、ユダヤ人でした。ですから、この囲いに属する羊たちとは、ユダヤ人のことで、この囲いに属さないほかの羊たちとは、異邦人のことだと考えられます。イエス様は、ユダヤ人だけでなく、異邦人をも導かなければなりませんでした。そうして、ユダヤ人と異邦人が一つの群れとなり、一人の牧者イエス様に聞き従うようになる、それがイエス様のヴィジョンでした。

そもそも私たち日本人や韓国人は異邦人であり、「囲いに属さないほかの羊たち」でした。しかしイエス様が十字架に架かり、復活された時、ユダヤ人と異邦人の隔ての壁が壊され、

イエス様を一人の牧者に持つ、一つの群れ、「神の家族」とされたのです（エペソ 2：11-19）。私たちは今、イエス様の十字架と復活により、「囲いに属する羊」とされています。しかし今もまだ、「囲いに属さないほかの羊たち」がいるのではないのでしょうか。これから私たちの囲いに属する、これから私たちと一つの群れとなる、これから私たちの神の家族となる、イエス様の羊たちがまだ沢山いるのではないのでしょうか。イエス様は、まだご自分の羊たちを捜しておられる、導こうとしておられるのではないのでしょうか。

パウロがコリントの町で伝道している時、イエス様は幻によってこう言われました。「**恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから**」(使徒 18:9-10)。伝道というのは、何もない所から救われる人を起こすものではありません。伝道とは、イエス様の羊を見つけ出すこと、イエス様の民を見つけ出すことです。すでにイエス様がご自分の羊、ご自分の民を用意してくださっているのです。その羊、その民を見つけ出すことが伝道です。イエス様が用意してくださっている羊たちは、イエス様の声に聞き従うのです。ですから、私たちがイエス様の言葉を語り、イエス様の声を響かせているならば、必ずイエス様の羊たち、イエス様の民を見出すことができるのです。

私たちにはまだ、クリスチャンとノンクリスチャンという隔ての壁があるかもしれません。夫と妻の間にも、親と子の間にも、友人との間にも。しかしイエス様はやがて、この隔ての壁を壊して、共にイエス様を牧者に持つ、一つの群れ、神の家族としてくださるのではないのでしょうか。私たちの家族にも、私たちの友人にも、この地域にも、イエス様がいのちを捨てた、イエス様の羊たちがまだ沢山いると、私たちは信じなければならないのです。

4. 自分から命を捨てる権威

最後に、17-18 節でイエス様はこう言われます。「**わたしが再びいのちを得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです**」。

ここでイエス様は、父なる神様とイエス様の関係を語っておられます。ご自分の羊のためにいのちを捨てる、それは、父なる神様からの命令でした。しかしイエス様はそれを、ご自分の意志で、ご自分の権威と自由の中でそれを行われたのです。決して、父なる神様から強制されたものではありません。強制ではなく、自由の中で、イエス様は父なる神様に従順であったからこそ、父なる神様とイエス様の間に、真実な愛の関係があったのです。

イエス様は、いのちを得るために、ご自分のいのちを捨てられました。イエス様は、十字架でご自分のいのちを捨てられたからこそ、私たちのために永遠のいのちを獲得してくださいました。そして、私たちに永遠のいのちを与えてくださったのです。

イエス様は、いのちを得るためにこそ、いのちを捨てられたのです。私たちも、得るためには捨てなければならないということがあるのではないのでしょうか。永遠のいのち、つまり

新しいいのちは、イエスを神の子、救い主と信じる時に与えられます。しかしその時に、古いのちを捨てるということも大切なのではないのでしょうか。言い換えれば、古い生き方を捨てるということです。クリスチャンの中には、古い生き方を引きずりながら、クリスチャンとして歩んでいる人もいます。そうかと思うと、ある人は、クリスチャンになる時に、古い生き方をきっぱり捨てる人もいます。両者ともクリスチャンには変わりありませんが、両者のクリスチャンとしての歩みは大きく違ってくると思います。

パウロはこう言いました。**「あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです」**(ローマ 6:3-4)。洗礼は、私たちの古い人がイエス様と共に十字架で死んで、新しいいのちによみがえったことを表すものです。洗礼を受けた時、私たちの古い生き方は死んだはずなのです。新しいいのちに生きるためには、古いいのち、古い生き方を捨てるべきなのです。しかし私たちはそれを強制されてするものではありません。私たちのためにいのちを捨ててくださったイエス様の前に、自分の意志で、自分の権威と自由でそれを行うのです。私たちは、古いいのち、古い生き方を捨てる権威と自由があり、新しいいのちを得る権威と自由があるのです。私たちのためにいのちを捨ててくださったイエス様の前に、その権威と自由をどう用いるかが問われているのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはかつて、羊飼いのいない羊のようにさ迷っていました。しかしイエス様が私たちを見つけ出し、ご自分の羊として受け入れてくださいました。そして、私たちはあなたの声を聞き分け、あなたについて行くようになりました。あなたは、「良い牧者」で、私たちのことをいつも心配し、私たちのためにいのちまで捨ててくださいました。どうか、あなたの前に、私たちも捨てるべきものを捨てることができますように。そうして新しいいのちに生かしてください。また、あなたがいのちを捨てたあなたの羊たちが、まだ私たちの家族にも、友人にも、地域にもいることを信じさせてください。どうかそれらの羊たちと、一つの群れ、神の家族となる日が一日も早く訪れますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。